

## 第5章 児童・生徒理解に基づく道徳の評価

数値による評価は行わないとされている道徳の評価の在り方を研修します。

### 1 評価についての基本的理解

はじめに

次の二つの質問に答えましょう。

①道徳は評価できるのでしょうか。また、すべきでしょうか。その理由とともにお答えください。

②評価するとしたら、どのような評価をし、どのようなことに気をつけるべきでしょうか。

①②は道徳の評価についての根本になります。このことを考えながら本章で研修ください。※本章の内容は、<http://uchidat.com> my report→学図情報誌 道徳通信2号>道徳科の評価に基づいています。

#### (1) 評価は何のために行うのか

まずは、一般論としての評価についてです。評価は何のために行うのでしょうか。評価の目的です。

評価は次の三つについて行われます。

##### ○教育課程(年間指導計画)の評価

道徳の場合、全体計画、年間指導計画、学級指導計画の策定が謳われていますから、それらすべての計画ということになります。

##### ○指導の評価

教師の指導のあり方です。

##### ○子供たちの評価

子供たちの学習状況の把握です。

これら三つの評価を Uchida は評価の三態と言ってきました。それぞれの目的は、計画等の改善であり、指導の改善であり、子供たちの意欲の向上であり、目標への確かなアプローチを図ることです。

要するに評価行為の基本は「生かす評価」なのです。

しかしながら、多くの教師が「評価事務」のための評価として「**ください評価**」へ傾斜してきました。正確な評価、客観的な評価を追求していましたが、果たして正確で客観的な評価は可能なのでしょうか。評価は信頼されることは

重要ですが、それは正確性や客観性だけを意味するものではありません。

#### (2) 学習評価の基本

指導要領第1章総則 第3の2には学習評価の充実として次のような配慮事項が掲げられています。

学習評価の実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

※ (●番号及び下線は Uchida)

(1) ①児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、②単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、③学習の過程や成果を評価し、④指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

(2) 創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて児童の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること。

(1)の①は、評価の目的。②は、ねらいや指導内容に基づいて、場面や方法を工夫して評価することで、テストだけでは不可能であること。③は、学習の過程を形成的に評価すること。④は、評価のねらいを示しています。(2)は評価が組織的、計画的、継続的に行われて子供の学習に資し、信頼される評価にするようにということが述べられています。

この評価の記述は、第1章総則第3に位置付いていますが、その第3は「教育課程の実施と学習評価」。1は、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」で、2の「学習評価の充実」とセットになっています。教育課程

## 第5章 児童・生徒理解に基づく道徳の評価

数値による評価は行わないとされている道徳の評価の在り方を研修します。

の実施、すなわち授業の改善と学習評価の充実  
は密接不離な関係にあり、学習評価の充実は、

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた  
授業改善に資するためなのです。

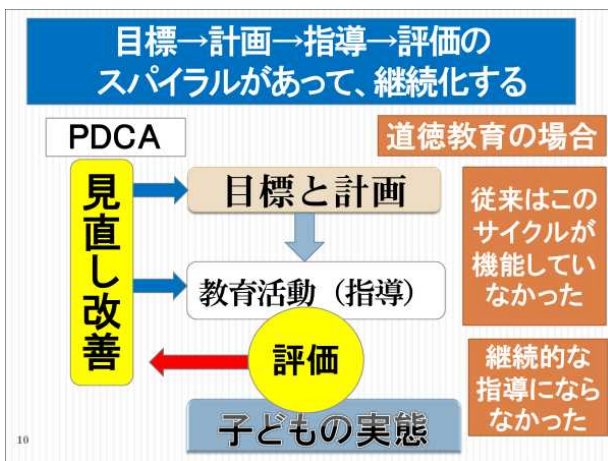
### 広い目(愛)で長い目(愛)で多くの目(愛)で

評価者の基本的姿勢について述べます。

(2)で取り上げた指導要領第1章総則第3の2  
(1)における①は子供の至らぬ点を見つける評価  
とは対極の評価観で、子供のよい点や進歩の状  
況に評価の目を注ぐことを意味しています。こ  
のことは前章3 (4) で述べた対話を可能にする  
三つの要素「先生の温かいまなざし」に通じま  
す。子供のよさや進歩、即ち成長を見つめる目  
は子供にとっては教師から注がれる温かなま  
なざしです。それは子供の自己有用感を育み、能  
動的な学習行動を喚起します。要するに評価自  
体が子供の学習活動に資するのです。しかも、  
それは(2)組織的かつ計画的に、継続的にです  
から、評価は広い目(愛)で、長い目(愛)で、多  
くの目(愛)でということに尽きるのです。

### (3) 目標、計画、実施、評価のスパイラル 評価は単独では存在しない

(2)までに述べてきたことは、総則に基づい  
た「評価」です。総則は全ての領域にかかる原  
則です。次のシートは評価が単独では存在しな  
いことを図示しています。各教科も道徳も特別  
活動の評価も原則的には同じです。



評価は単独では存在しません。目標に基づい  
た計画がなされ、その計画が実施(教育活動・

指導)されて、評価があります。目標から始ま  
る教育活動の反映として子供の姿(実態)を診  
るのです。そうして、明らかになった子供の姿  
から目標や計画、指導に見直し改善を加え、再  
び目標、計画、実施、評価のスパイラルに入り  
ます。各教科等における評価(目標に準拠した  
評価)では、目標が実現できていないとした  
ら、どのように計画や指導を改善するかを探り  
ます。この連続性の中で私どもは教育活動を展  
開しているはずで

この目標→計画→指導→評価がいわゆるPDC  
Aで、実際はCがAを促しPを統制することにな  
りますからCAPDです。

要するに、目標や計画、指導と関係なく評価  
が実施されることはありません。

また、評価は子供を「ください」ために行うの  
ではありません。あなたは癌ですと診断し、そ  
の後、治療行為をしなかったら、それは地獄行  
きの宣告に等しいのです。

評価は三態。教育課程の評価(目標・計  
画)、指導の評価、子供たちの評価。共に目指  
すのは改善で、「生かす」評価です。

### (5) 評価観を問い直そう

このように第1章総則第3を理解すると、今  
まで抱いていた評価観とずいぶん違うことに気  
づくでしょう。今回の改訂では、授業は「主体  
的、対話的で深い学び」を目指した授業改善の  
実現を目指しています。ということは、自らの  
授業において、子供自らが(主体的に)学び、  
対話する学びの過程がなければ評価はできない  
ということです。

[整理しよう] 自分が理解していた評価とは異  
なることを整理しましょう